第２章　京都大学医学部構内ＡＮ18区の発掘調査

五十川伸矢　　宮本一夫

１　調査の経過

本調査区は，吉田山の西麓，京都大学医学部構内の西部に位置する(図版１-143)。ここに医学部基礎校舎の新営が計画されたため，隣接するＡＯ18区の調査成果〔泉・吉野79〕を勘案して，新営予定地全域の発掘調査を実施することになった。発掘調査は，昭和59年９月１日に開始し，昭和60年３月末に終了した。調査面積は1920.4㎡。調査の結果，旧建物の基礎などによって，著しく遺跡が破壊されていることが判明したが，それにもかかわらず，古代の河川，中世の溝・土坑・井戸・梵鐘鋳造遺構や近世の道路・溝・水田などが検出され，吉田山西麓に位置する当地の歴史的景観の変遷を解明する資料を得ることができた。調査区一帯は中世に藤原北家勧修寺流の人々の邸宅や菩提寺が存在したことが推定されており，今回の調査成果は，これを検討する材料となるだろう。また，梵鐘鋳造遺構は教養部構内ＡＰ22区の検出例〔五十川・飛野84〕と同様に，全国的にみても類例の少ないものである。

２　層　　位

本調査区の基本層序は，上から順に表土(第１層)，灰褐色粘質土(第２層)，灰褐色砂質土(第３層)，茶褐色土(第４層)，黄褐色砂質土(第５層)，地山の灰褐色砂礫(第６層)である(図１)。灰褐色粘質土と灰褐色砂質土は近世後半の水田の耕土と床土を形成するものである。灰褐色砂質土は，地山の段差がある地点でともに落ち込み，棚田が形成されていたと考えられる。現在の西に向かって緩傾斜をなす地形は，その後の造成によって形成されたと推定できる。

茶褐色土は調査区全面にみられるが，東半部の地山の高い地点では薄い堆積層をなしている。茶褐色土は地山の段差のある部分で同様に落ち込んでおり，地山の段差を境に高い地点の茶褐色土が低い地点の茶褐色土の上に堆積している。また，調査区北壁東半部付近にみられる茶褐色土には，多量の焼壁片が含まれており，この地点周辺に，なんらかの建物遺構の存在が予想される。この茶褐色土は，13～14世紀ごろの遺物を包含している。なお，茶褐色土は調査区西北部の西端に位置する梵鐘鋳造遺構ＳＸ13付近では，上層と下層

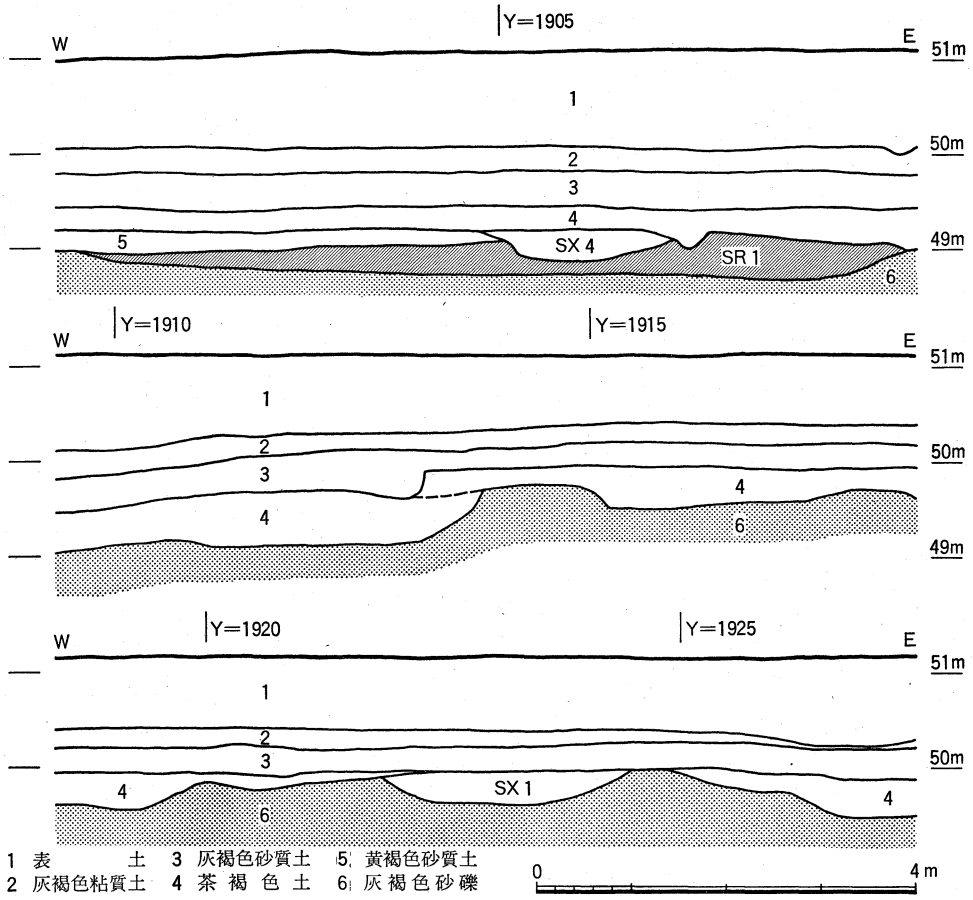


図１　調査区東西畔の層位　縮尺1/80

で包含する遺物に多少時期差が認められる。この鋳造遺構は下層の13世紀前葉ごろのものと推定される。

地山には灰褐色砂礫のほか，黄色砂，黄灰色シルトもあり，このうち灰褐色砂礫は，高野川系流路によってもたらされた可能性がある。この灰褐色砂礫の上に堆積した黄色砂，黄灰色シルトは，調査区東半部に多くみられる。中世には，この黄灰色シルトを採取するために，東南部に土取り穴が掘削された。また，調査区中央部で，西側へ地山が急激に落ち込み，南北につづく段差を形成している。この地山の落ち込み部に北東から南西方向に河川ＳＲ１が流れ込んでいる。このＳＲ１は，11世紀のものと推定できる。調査区西北部では，ＳＲ１の埋積後，ＳＲ１から調査区北西端にかけて黄褐色砂質土が堆積している。この層は，本調査区ではこの地点のみにみられる。

3　古代・中世の遺跡

(1)　古代の遺構（図２）

調査区西北部には，北東から南西にむかって流れる河川ＳＲ１が存在する。埋土には，須恵器壺，緑釉陶器椀などが少量包含されている。これらの遺物は11世紀の特徴を示しており，ＳＲ１はそのころに埋積したものと推定される。この南西方向に流れる河川ＳＲ１は，調査区西端近くを南流していたと推定される高野川系流路にそそぐ一支流と考えることができ，調査区の地形が安定するのは，このＳＲ１の埋積後，すなわち11世紀以後のことになる。

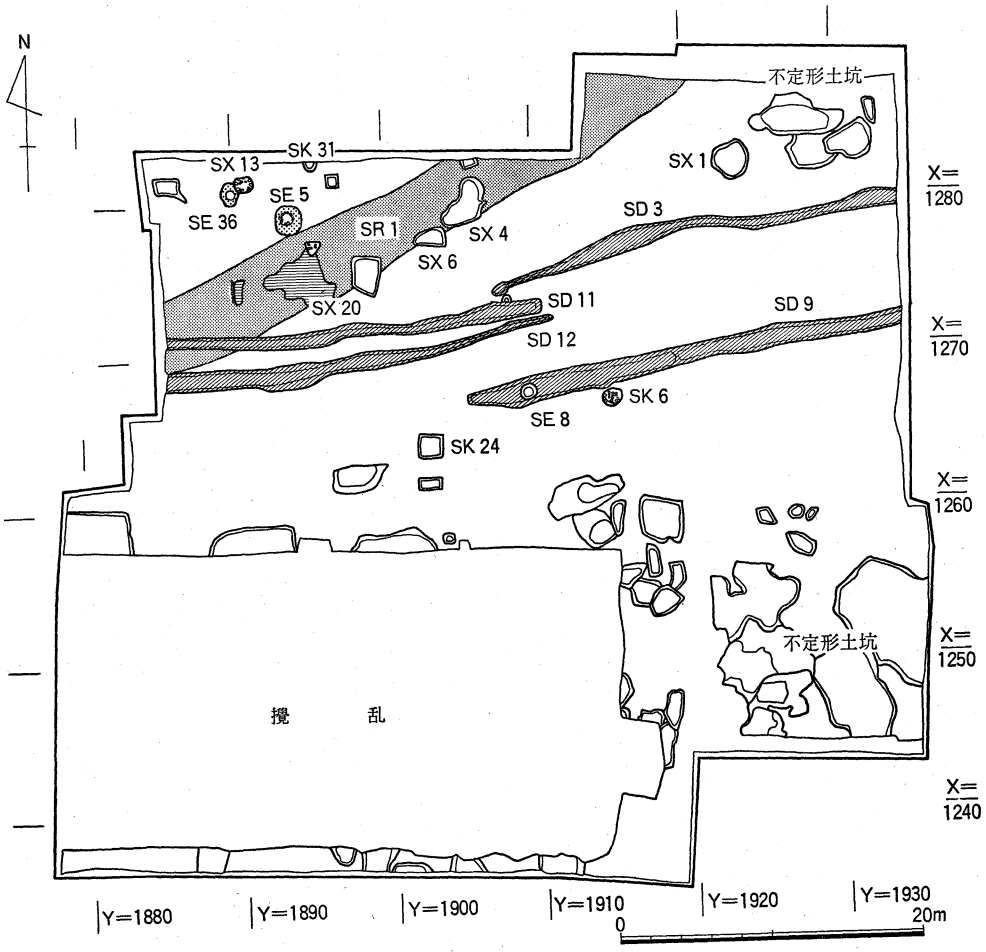


図２　古代・中世の遺構　縮尺1/500

⑵　**中世の遺構**（図版２・３，図２・３）

調査区西北部には，井戸や柱穴などの生活に関連する遺構や梵鐘鋳造遺構がある。また中央部には南西方向に溝がはしり，東半部から南半部には土取りによる不定形土坑が存在する。このように，性格の異なる遺構は地域を異にして分布する。

井　戸　　ＳＥ５とＳＥ36は石組すり鉢形の井戸で，ＳＥ５は12世紀後葉～13世紀前葉，ＳＥ36は13世紀前葉の遺物が出土した。ＳＥ８は桶積み上げ井戸で，14世紀前葉の遺物が出土した。

溝　　近世の道路ＳＦ１とほぼ同様の位置で，しかも同じ方向に，ＳＤ12，ＳＤ11，ＳＤ９，ＳＤ３の４本の溝が存在する。ＳＤ12は12世紀後葉～13世紀前葉，ＳＤ11は13世紀中葉，ＳＤ９は13世紀後葉，ＳＤ３は14世紀前葉の年代を示し，あいついで掘削されたことがわかる。これらの溝は，それぞれが地山の段差部で終結しており，段差を利用して土地境界として機能していたと考えられる。

土　坑　　ＳＫ６は粗雑な石組をもった土坑である。出土遺物が少なく年代を特定しがたいが，調査区北半の遺構の時期におさまるものと考えられる。ＳＫ24は一辺約１ｍの方形の土坑で，14世紀中葉ごろの遺物が出土した。また，ＳＫ31は調査区北壁中央部でその南半分を検出し，13世紀中葉ごろの遺物が出土した。

柱　穴　　調査区の北東部一帯には多数の柱穴があり，またその付近から焼壁片が出土しており，建物の存在が想定できるが，その平面位置を確定することはできなかった。

不定形土坑　　調査区の北東部から南半には，不定形土坑がひろく分布している。これらは地山の黄灰色シルトを掘削した跡である。その形や大きさは一定せず，年代も14世紀にはじまり14世紀中・後葉に増加し15世紀前葉ごろにまでおよぶ。

土間状遺構　　調査区の西端中央部に土間状遺構ＳＸ20がある。これは地山の灰褐色砂礫層の上面に黄灰色シルトを固くたたきしめたもので，西側に石列がならぶ。入口の敷石となるものであろうか。柱穴をいくつか検出したが，明確な建物を検出することはできなかった。

梵鐘鋳造遺構　　調査区の北西隅で梵鐘鋳造遺構ＳＸ13とＳＸ17を検出した。ＳＸ13は，井戸ＳＥ36の上に構築されており，小型の鉄製の梵鐘を鋳造したものである。13世紀前葉ごろのものと推定できる。ＳＸ17は梵鐘の鋳型を捨てた場所でＳＸ13の鋳型とは異なっており，その年代も明確でない。これらの梵鐘鋳造遺構に関しては，第４節でその遺構の構造や出土鋳型について詳述する。

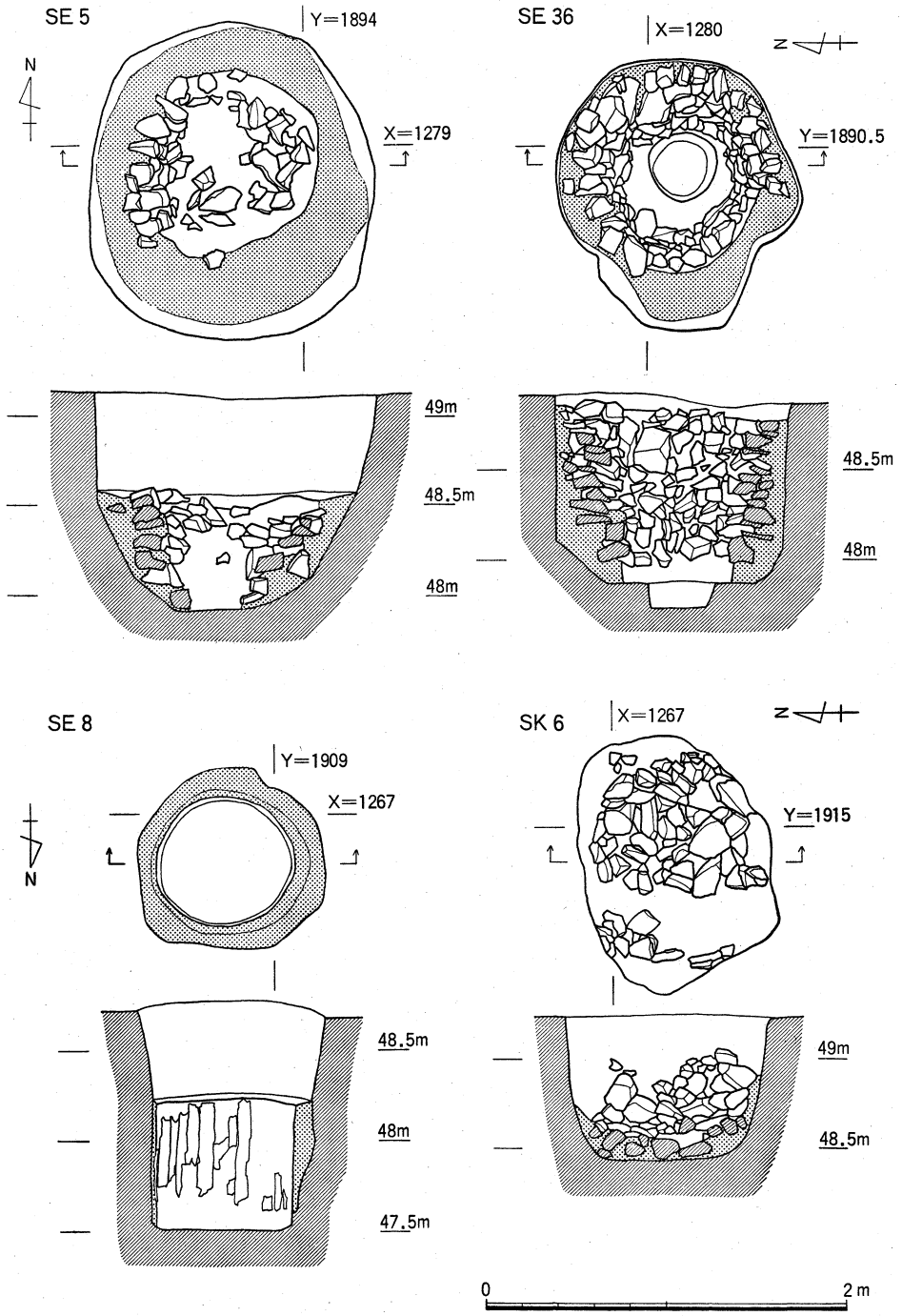


図3　井戸ＳＥ５・ＳＥ36・ＳＥ８，土坑ＳＫ６　縮尺1/40

⑶ 古代・中世の遺物（図版５・６，図４～８，表１）

古代の遺物はＳＲ１から出土した。Ｉ32は須恵器壺である。瓦質で底径が大きく胴部が半球形状を呈する。11世紀中頃の特徴を示す〔宇野84〕。Ｉ33の緑釉陶器の椀は近江産である。高台断面が三角形状を呈しており，退化傾向を示す。11世紀代のものと考えられる。

中世の包含層は13～14世紀の遺物を主体としている。12世紀後葉～13世紀前葉の土師器皿をともなうＳＥ５，ＳＤ12を除いて，主体を占める13～14世紀代の良好な一括資料をもつ井戸，溝，土坑が存在する。これらはＳＥ36，ＳＫ31，ＳＤ９，ＳＫ24，ＳＸ６であり，この時期における土師器編年の再検討の基準とすることができる。

ＳＥ36は，本調査区内で，最も豊富な土師器が出土した井戸である。口縁部計測法によって総個体数を総計し，その法量を表１に示した。また土師器の分類に関しては，宇野隆夫の分類〔宇野81〕をもとにしている。ただし，宇野のいうＤ類のうちD_2類とD_3類に関し

表１　ＳＥ36出土遺物

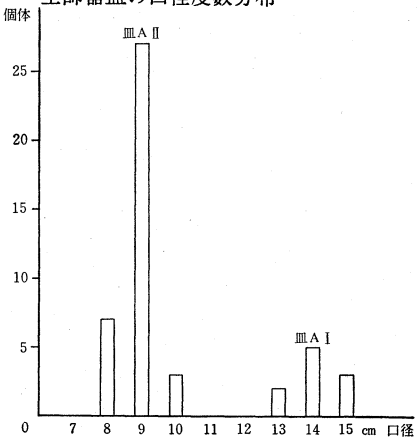
規格別口縁部形態の比率

個体数	皿ＡⅠ 11.0個体	皿ＡⅡ 38.3個体
C_3類	5.3%	
C_4類	17.9%	5.9%
C_5類	6.4%	
D_3類	30.4%	57.8%
D_5類	40.0%	36.3%
合　計	100.0%	100.0%

種類別の比率

総個体数	49.5個体
皿ＡⅠ	22.3%
皿ＡⅡ	77.5%
受　皿	0.2%
合　計	100.0%

土師器皿の口径度数分布



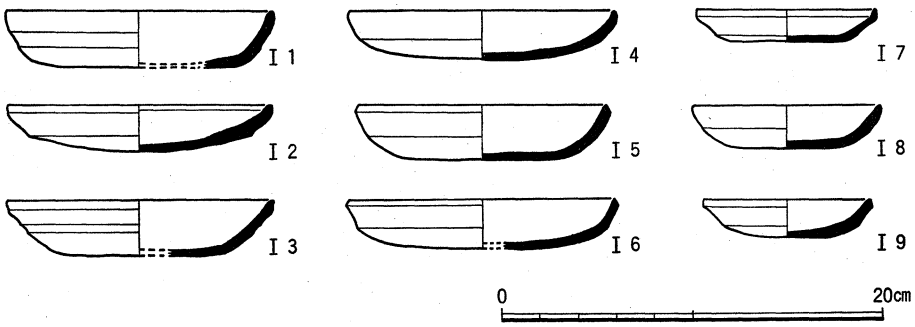


図４　ＳＥ36出土遺物（Ⅰ１～Ⅰ９土師器）

ては，明瞭に区別し得ない場合が多い。1段撫で手法で，口縁が直線的ないし，弱く内湾し，端部が丸いものは，D_3類として一括した。一方，1段撫で面取り手法はD_4～D_6類に細分されている。このうち，D_5類は底部から口縁にかけて屈曲が鋭いものをいい，D_4類とは区別できるが，これは漸移的な変化のため明瞭に分離し難い。ここでは一応D_5類にD_4類を含めて考えておきたい。また，D_6類に関しては，D_5類と同じ製作技法をもつも

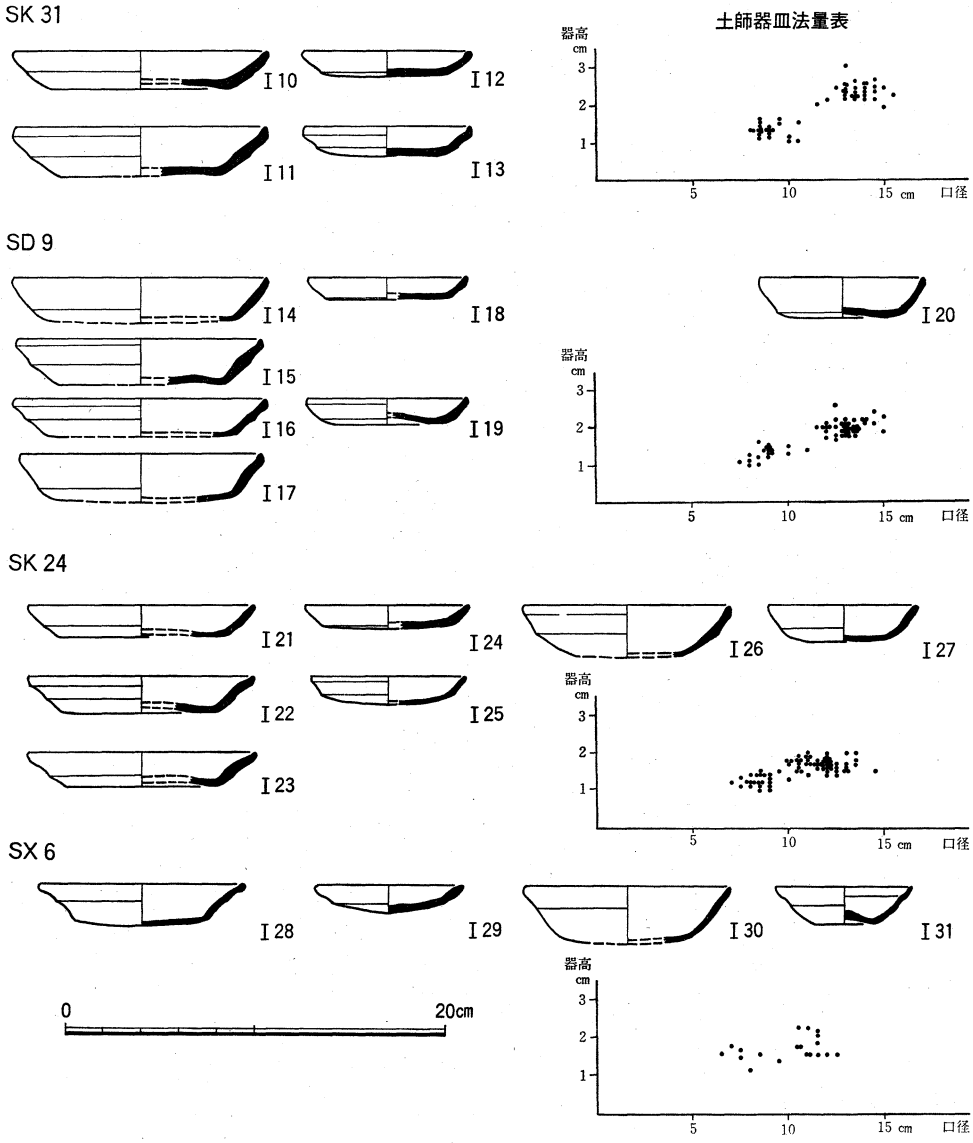


図5　13～14世紀の土師器皿・椀の変遷

ののうち，法量の小さいものをさし，D_6類をD_5類に含めて考えたい。このような分類基準にしたがって，ＳＥ36を眺めると以下のようになる。Ｉ１～Ｉ６は大型の皿(皿ＡＩ)，Ｉ７～Ｉ９は小型の皿(皿ＡⅡ)である。Ｉ１は２段撫で手法C_3類，Ｉ２・Ｉ７は２段撫でつまみ上げ手法のC_4類，Ｉ３は２段撫で面取り手法のC_5類，Ｉ４・Ｉ８は１段撫で手法D_3類，Ｉ５・Ｉ６・Ｉ９は１段撫で面取り手法D_5類である。皿ＡＩは総数11個体と少ないが，D_5・D_3類が主体を占め，C_4類がこれにつぎ，少量のC_3・C_5類が存在する。皿ＡⅡは総数38.3個体で，D_3・D_5類を主体とし，C_4類が少量みられる。法量では，皿ＡＩが口径14cm，皿ＡⅡが口径９cmにピークがみられる。法量において，これらを他の基準資料と比較すれば，白河北殿北辺の調査ＳＤ13(平安京Ⅳ期新段階)〔宇野81〕や教養部構内ＡＯ21区ＳＥ６(中世京都Ⅰ期古段階)〔泉83〕に対比ができる。平安京Ⅳ期新段階から中世京都Ⅰ期古段階への変化は型式学的には，D_4類からD_5類への変化によって説明されている〔宇野81〕が，現実的には上述したように，D_4類とD_5類は明確に区別できない。平安京Ⅳ期新段階と中世京都Ⅰ期古段階を，土師器皿のみから区別することは，難しいといえよう。後述する土師器以外の共伴遺物の検討から，ＳＥ36を中世京都Ⅰ期古段階のものとしておきたい。

ついで，ＳＫ31，ＳＤ９，ＳＫ24，ＳＸ６の土器変化過程について詳述したい。これらの土師器は口縁部計測法による個体数復原にたえ得るような資料数をもたないところから，残存部1/12以上のものを１点として法量表を作成している。定量的なあり方を知ることはできないが，法量の変化過程の目安になるものと思われる。

Ｉ10～Ｉ19・Ｉ21～Ｉ25・Ｉ28・Ｉ29は土師器皿で，そのほかは灰白色の土師器椀である。皿のうち，法量表においても皿ＡＩと皿ＡⅡに大別できる。大型である皿ＡＩは法量表で示すようにＳＫ31からＳＸ６にかけて次第に口径を減じており，各遺構ごとに14，13，12，11cmを平均値とする。小型である皿ＡⅡも，明瞭ではないが口径の縮小化の傾向にある。次に土師器の製作上の手法に注目すると，皿ＡＩと皿ＡⅡとでは１段撫でを施すもので面取りするものとしないものにわかれる。それぞれを仮にａ手法，ｂ手法と呼んで皿ＡＩを眺めてみよう。ＳＫ31ではａ手法のＩ11とｂ手法のＩ10がある。ＳＤ９では同様にａ手法のＩ15とｂ手法のＩ14があるが，他に１段撫でをより外反気味に施し器壁の薄いＩ16・Ｉ17が出現する。それぞれａ手法のＩ16，ｂ手法のＩ17に細別できる。ＳＫ24では従来のｂ手法のＩ21が残存するものの，縮小化して口縁を外反させて１段撫でを施すａ手法のＩ22，ｂ手法のＩ23が主体を占める。ＳＸ６では器壁が薄くより口縁を外反させたｂ手法

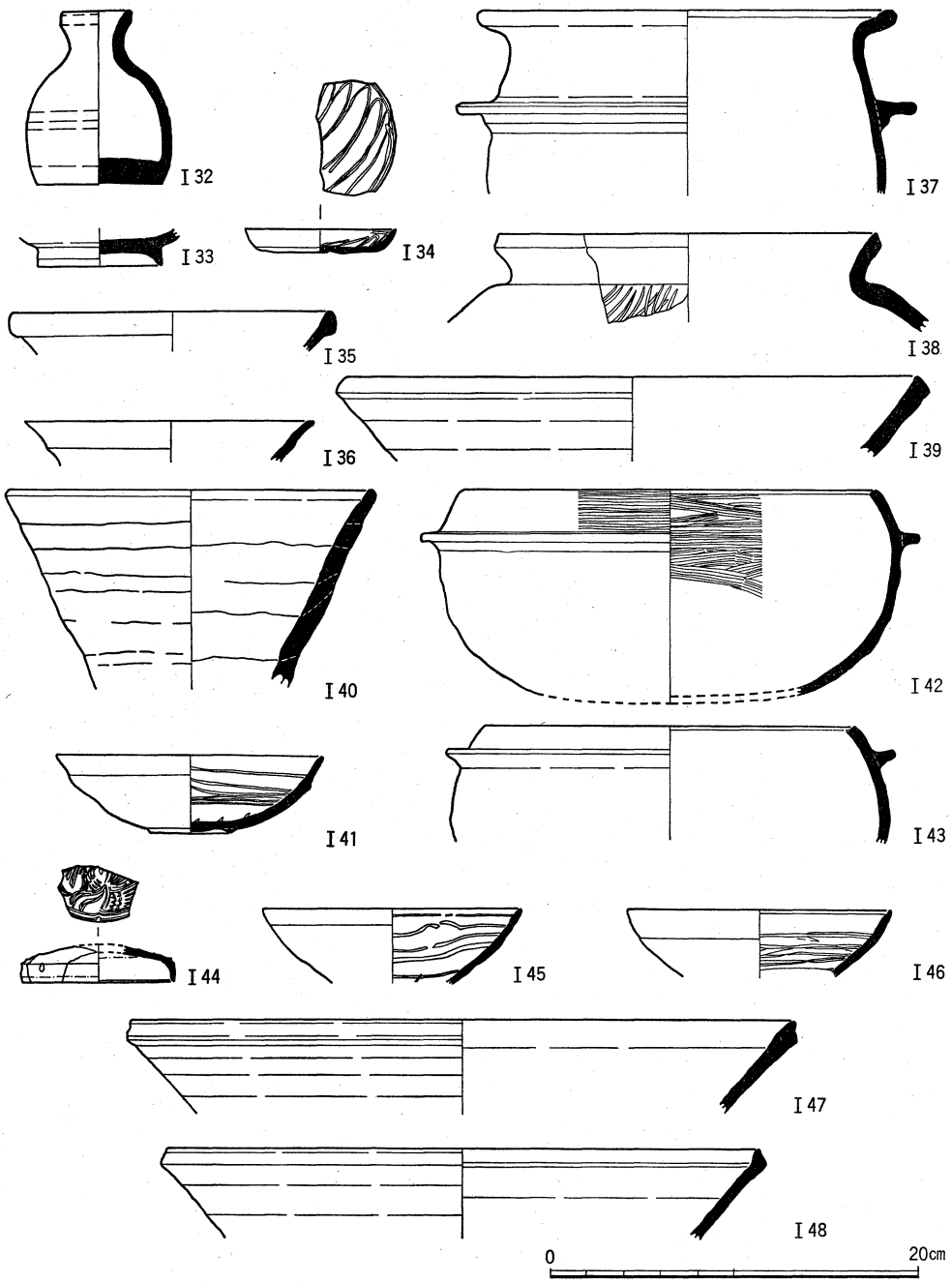


図6　ＳＲ１出土遺物（Ⅰ32須恵器，Ⅰ33緑釉陶器），ＳＥ36出土遺物（Ⅰ34瓦器，Ⅰ35白磁，Ⅰ36灰釉系陶器，Ⅰ37土師器，Ⅰ38・Ⅰ39須恵器），ＳＤ11出土遺物（Ⅰ40土師器，Ⅰ41～Ⅰ43瓦器），ＳＫ31出土遺物（Ⅰ44白磁，Ⅰ45・Ⅰ46瓦器，Ⅰ47・Ⅰ48須恵器）

のⅠ28がみられる。この段階ではほぼｂ手法のみに移行する。同様に皿ＡⅡについてもａ手法，ｂ手法が各段階に併存してみられるが，ＳＸ６でｂ手法のみの退化形態であるⅠ29に変化している。以上のように，皿の場合，ＳＫ31からＳＸ６にかけて明瞭に型式学的変化過程が追えるとともに，各段階での法量規格の推移がよみとれる。一方，灰白色の椀はＳＤ９以降にみられる。大型の椀ＡⅠと小型の椀ＡⅡに分けられるが，椀ＡⅡのⅠ20がＳＤ９で初出し，椀ＡⅠのⅠ26はＳＫ24で初出する。椀ＡⅠは，ＳＫ24では口縁端部を面取り風に内湾させたⅠ26であるが，ＳＸ６では面取りをせず口縁が外反気味なⅠ30になっている。また，椀ＡⅡはＳＤ９からＳＸ６にかけてⅠ20，Ⅰ27，Ⅰ31と底径を次第に減じ口縁を次第に外反させながら外面の撫で幅を狭めている。そしてＳＸ６の段階に至って，凹み底小椀のⅠ31へと変化する。

以上，次第に外反気味な撫でを施すという椀と皿に共通した型式学的変化過程を理解しえた。従来の分類でいえば，皿ＡⅠの場合Ⅰ10・Ⅰ14・Ⅰ21がD_3類，Ⅰ11・Ⅰ15がD_5類，Ⅰ17・Ⅰ23がE_1類，Ⅰ16・Ⅰ22がE_2類，Ⅰ28がE_3類に該当しよう。同時に，各段階の

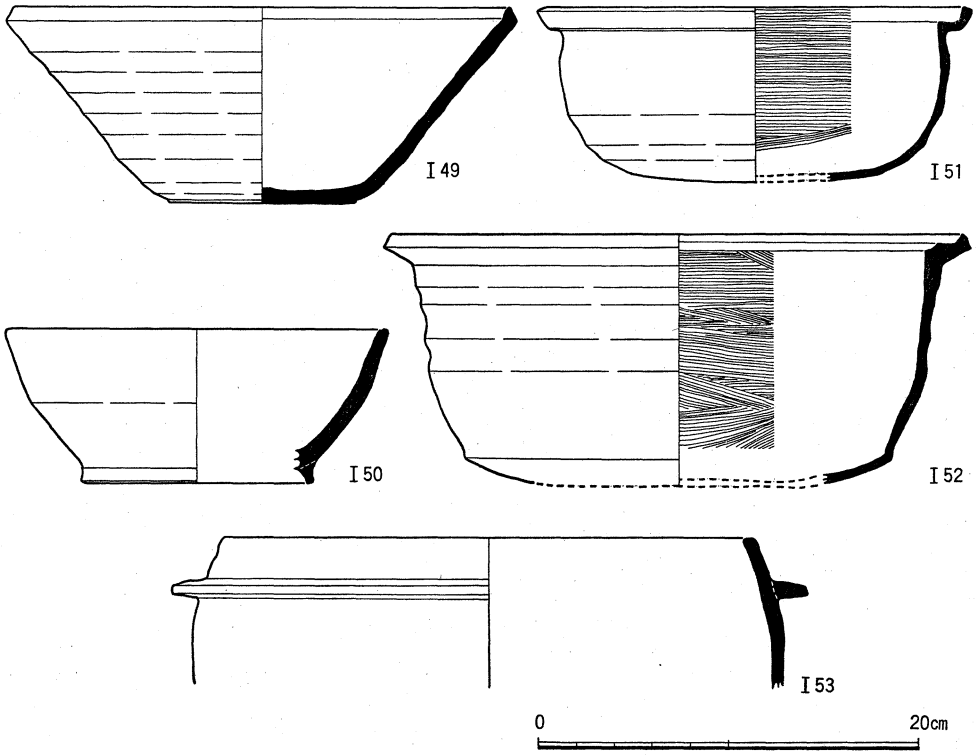


図７　ＳＤ９出土遺物（Ⅰ49須恵器，Ⅰ50灰釉系陶器，Ⅰ51・Ⅰ52瓦器，Ⅰ53土師器）

皿の法量規格が漸次縮小していく変化過程を知ることができたといえよう。従来の土師器編年とてらし合せれば，ＳＫ31が中世京都Ⅰ期中段階(13世紀中葉)，ＳＤ９が中世京都Ⅰ期新段階(13世紀後葉)，ＳＫ24が中世京都Ⅱ期古段階(14世紀前葉)，ＳＸ６が中世京都Ⅱ期中段階(14世紀中葉)にあたると考えている。ここで，これら土師器皿・椀に伴出するその他の輸入陶磁器・中世陶器から，この編年観の妥当性を述べてみたい。

Ⅰ34～Ⅰ39はＳＥ36出土遺物である。Ⅰ34は瓦器小皿。口径８㎝とやや小ぶりであるが，見込みには省略された暗文を施すところから，橋本久和編年Ⅲ－１期にあたるものであろう〔橋本80〕。Ⅰ35は玉縁口縁の白磁椀，Ⅰ36は灰釉系陶器椀。Ⅰ37の土師器羽釜は頸

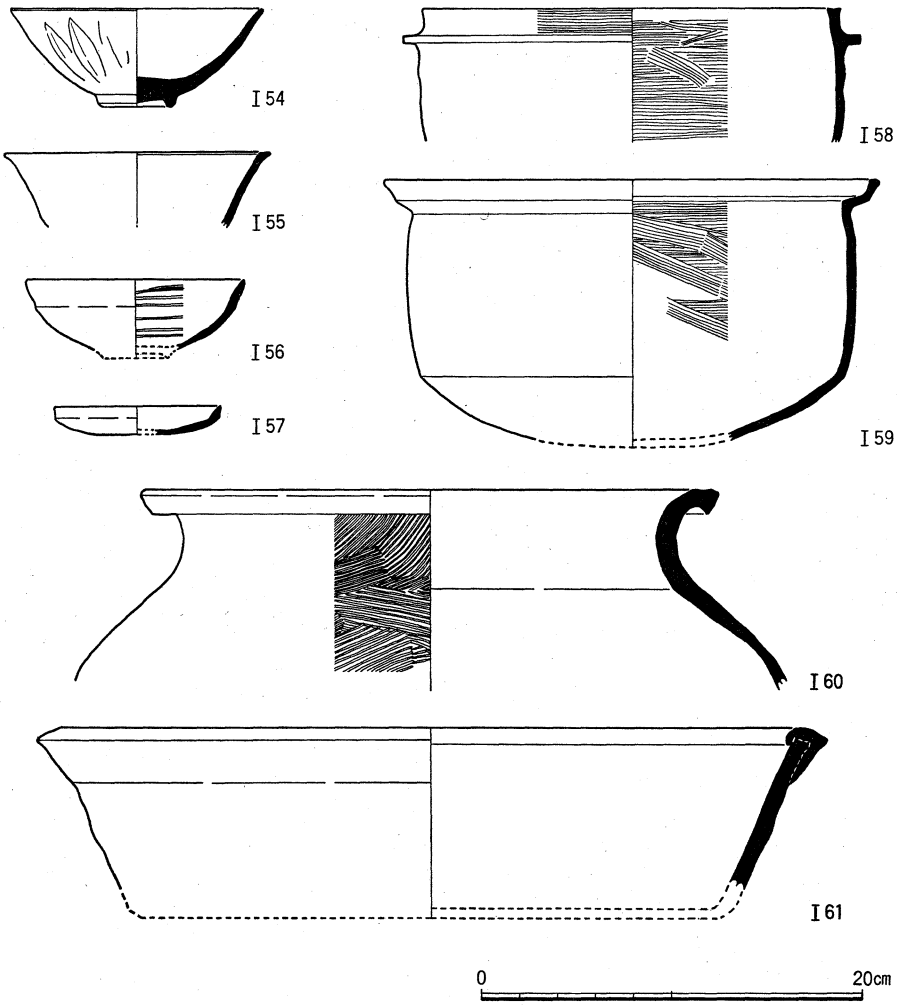


図８　ＳＫ24出土遺物（Ⅰ54青磁，Ⅰ55白磁，Ⅰ56～Ⅰ59・Ⅰ61瓦器，Ⅰ60須恵器）

部が内傾気味に立上がり，口縁端部を外反させて丸くおさめている。菅原正明のいう河内B_2型〔菅原83〕にあたり，13世紀前半代に位置づけられる。Ⅰ38は須恵器甕，Ⅰ39は須恵器すり鉢である。瓦器小皿や土師器羽釜の年代，あるいは須恵器甕・すり鉢の年代観〔宇野84〕から，ＳＥ36は中世京都Ⅰ期古段階(13世紀前葉)に比定しておきたい。

Ⅰ40～Ⅰ43はＳＤ11出土遺物である。Ⅰ40は土師器壺。一般に塩壺と呼ばれるもので，内外面に粘土紐の継ぎ目を残し口縁が外方に開く。類例は本部構内ＡＸ28区の中世京都Ⅰ期中段階のＳＫ51出土資料〔五十川83〕に認められる。Ⅰ41は瓦器椀。口径約14cmで内面には螺旋状の暗文を施し，見込みには同心円の暗文を施す。橋本編年のⅢ－２期にあたる。瓦器羽釜には三足がつかない。これは中世京都Ⅰ期古段階に出現する。浜崎一志の編年〔浜崎84〕によれば，Ⅰ42は中世京都Ⅰ期古段階，Ⅰ43はⅠ42にくらべ口縁が内傾し鍔部が上方につくところから，中世京都Ⅰ期中段階に相当しよう。したがって，瓦器椀や羽釜の編年観から，ＳＤ11は中世京都Ⅰ期中段階(13世紀中葉)のものである。

Ⅰ44～Ⅰ48はＳＫ31の出土遺物である。Ⅰ44は白磁の印花花鳥文合子蓋。Ⅰ45・Ⅰ46は瓦器椀。口径約14cmで，内面に螺旋状の暗文を施しており，Ⅰ41同様，橋本編年のⅢ－２期にあたるものであろう。Ⅰ47・Ⅰ48は須恵器すり鉢。宇野編年によれば，13世紀中ごろとされる。ＳＫ31は瓦器椀や須恵器すり鉢から，先の土師器皿の位置づけ同様，中世京都Ⅰ期中段階(13世紀中葉)に比定されよう。

Ⅰ49～Ⅰ53はＳＤ９出土遺物である。Ⅰ49は須恵器すり鉢，Ⅰ50は灰釉系陶器すり鉢。Ⅰ51・Ⅰ52は瓦器鍋である。Ⅰ51は口縁部が２段に屈曲するが，蓋受けの部分が水平で，屈曲が鋭いものである。浜崎編年によれば，中世京都Ⅰ期新段階といえる。Ⅰ52は口縁部の２段の屈曲部があまく，屈曲部内面を面取るものであり，類例は認め難い。Ⅰ53は土師器羽釜である。

Ⅰ54～Ⅰ61は中世京都Ⅱ期古段階のＳＫ24出土遺物である。Ⅰ54は龍泉窯系蓮弁文青磁椀，Ⅰ55は白磁椀である。Ⅰ56は瓦器椀，Ⅰ57は瓦器小皿である。瓦器椀は11.5cmと小ぶりで，内面には粗雑な螺旋暗文が施される。瓦器小皿は暗文がみられない。両者ともに，橋本編年のⅣ－１期にあたろう。Ⅰ58は瓦器羽釜。口縁部が短く直立する２類に分類される。Ⅰ59は瓦器鍋。Ⅰ51にくらべ口縁屈曲部はあまく，型式学的な退化傾向を示す。Ⅰ58・Ⅰ59ともに胴部下端で鋭角的に折れ曲がるようであり，この時期の特徴的遺物であろう。Ⅰ60は須恵器甕。胴部外面に細かく綾杉状に平行叩きを施しており，14世紀代のものであろう。Ⅰ61は瓦器盤。以上，総じて，中世京都Ⅱ期古段階の特徴を示している。

4　梵鐘鋳造遺構

注目すべき遺構として，中世の梵鐘鋳造遺構ＳＸ13を調査区北西隅で検出し，梵鐘鋳造のための内型や外型を発見した。この遺構はすべて調査後取上げて保存した。

(1)　遺構の構造（巻首図版，図９）

調査区北西隅の茶褐色土は，梵鐘の鋳型を包含しており，黄褐色砂質土の上面で，梵鐘鋳造時の現位置をたもつと考えられる内型と，その周辺に散乱する外型を発見した。内型は東半分を破壊されていたが，外径30cmで，残存高は約15cmである。その表面は堅く焼成され，赤褐色を呈する。内部は真土で形成され，鋳型の小片を含んでいる。中央部に空洞はないが，底部中央がややもちあがり，あるいは掛木が存在した可能性を示す。なお，内型と外型を設置する定盤を識別できなかった。

この内型の周囲を精査したが，鋳造坑は検出できず，鋳造時には内型は当時の地表面上に設置されていたと推測できる。また，内型の表面には鉄の小塊が付着しており，鋳造梵鐘が鉄製であったことを明瞭に示す。ＳＸ13は井戸ＳＥ36が埋積した直上に構築されており，13世紀前葉ごろの年代をあてることができる。

このほか，ＳＸ13の南側で銅を含んだ炉壁が出土した。また，梵鐘の外型の破片が若干集中して出土した。これらの外型はＳＸ17としてとりあげたが，鋳型を廃棄したものであ

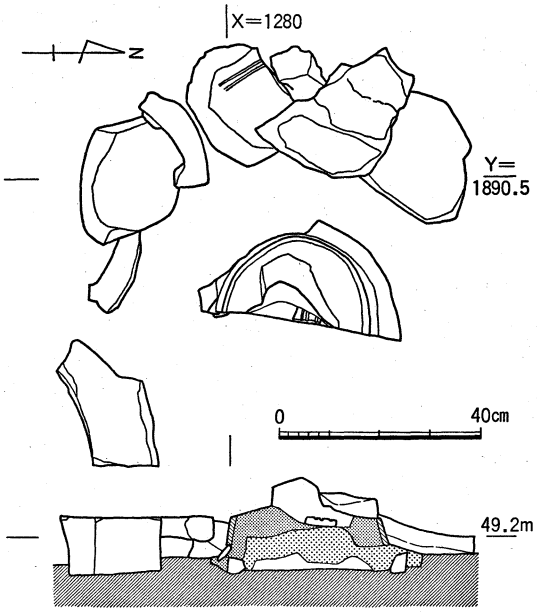


図９　梵鐘鋳造遺構ＳＸ13　縮尺1/15

り，その出土鋳型もＳＸ13出土の鋳型とは形態の異なる別個体のものである。

こうした中世の梵鐘鋳造遺構は，奈良県桜井市山田寺〔奈文研80pp.30-40〕，福井県坂井郡丸岡町豊原寺跡〔丸岡町教委81pp.18-19〕，福岡県太宰府市鉾ノ蒲遺跡〔山本・狭川84〕，大阪府南河内郡美原町真福寺遺跡〔大阪府教委86 pp.25-30〕，長野県上伊那郡飯島町寺平遺跡〔友野79〕，岐阜県恵那郡坂下町金屋遺跡〔坂下町教委75 pp.1-19〕などで発見されている。これらの遺跡では，いずれも一辺が２ｍ内外の隅丸方形の土坑内に，定盤と内型，外型を設置し，梵鐘を鋳造するものである。しかし，本調査区例は土坑をともなわず，当時の地表面上に内型と外型を設置したと考えられる。これは，これまでの発見例とまったく異なっている。

(2) 出土鋳型（図版７，図10）

ＳＸ13の内型の周囲から出土した外型の内径は30cm余で，この内型と組み合わせて梵鐘を鋳造するためのものであることがわかる。外型は粘質土の外壁の内側に，細かい真土を塗りつけて文様を付し，全体を赤褐色に焼成している。表面にはクロミ(煤)を付着させている。

梵鐘の各部分を特徴づける外型の実測図を図10に示す。Ｉ62～Ｉ72はＳＸ13出土鋳型，Ｉ73はＳＸ17出土鋳型である。

Ｉ62・Ｉ63は笠形と上帯，Ｉ64～Ｉ66は草の間，Ｉ67・Ｉ68は中帯の部分の鋳型である。笠形には凸線がなく，上帯にも文様はない。草の間の下方にある上下の外型の合わせ目には，段をつくっていることが特徴である。Ｉ69は撞座の部分の鋳型。撞座は直径約７cm。八花形の中房には１＋８顆の蓮子をふくみ，その外側には雄蕊帯をめぐらす。その周囲には，２個の子葉をふくむ複弁華文が配されている。この撞座の部分は別造りではなく型押しによるものであろう。Ｉ70～Ｉ72は下帯と駒の爪の部分である。上帯と同様，下帯にも文様はなく，駒の爪は，あまい稜をもち，やや外側に張り出す形態を示す。ＳＸ17出土の鋳型(Ｉ73)は，下帯の幅や駒の爪の形状がＳＸ13出土鋳型と異なっており，別個体であるが，下帯に文様がないことや復原径などは類似する。

このほか，ＳＸ13から文字あるいは装飾と考えられる彫り込みをもつ鋳型の小片が若干出土したが，小片のためこれらを判読することができない。

なお，この梵鐘鋳造遺構ＳＸ13については，その鋳造技術や鋳造された梵鐘に関して，五十川が第Ⅱ部で検討し，吉田山西麓一帯に存在した白河の鋳物工房に言及した。あわせて参照していただければ幸いである。

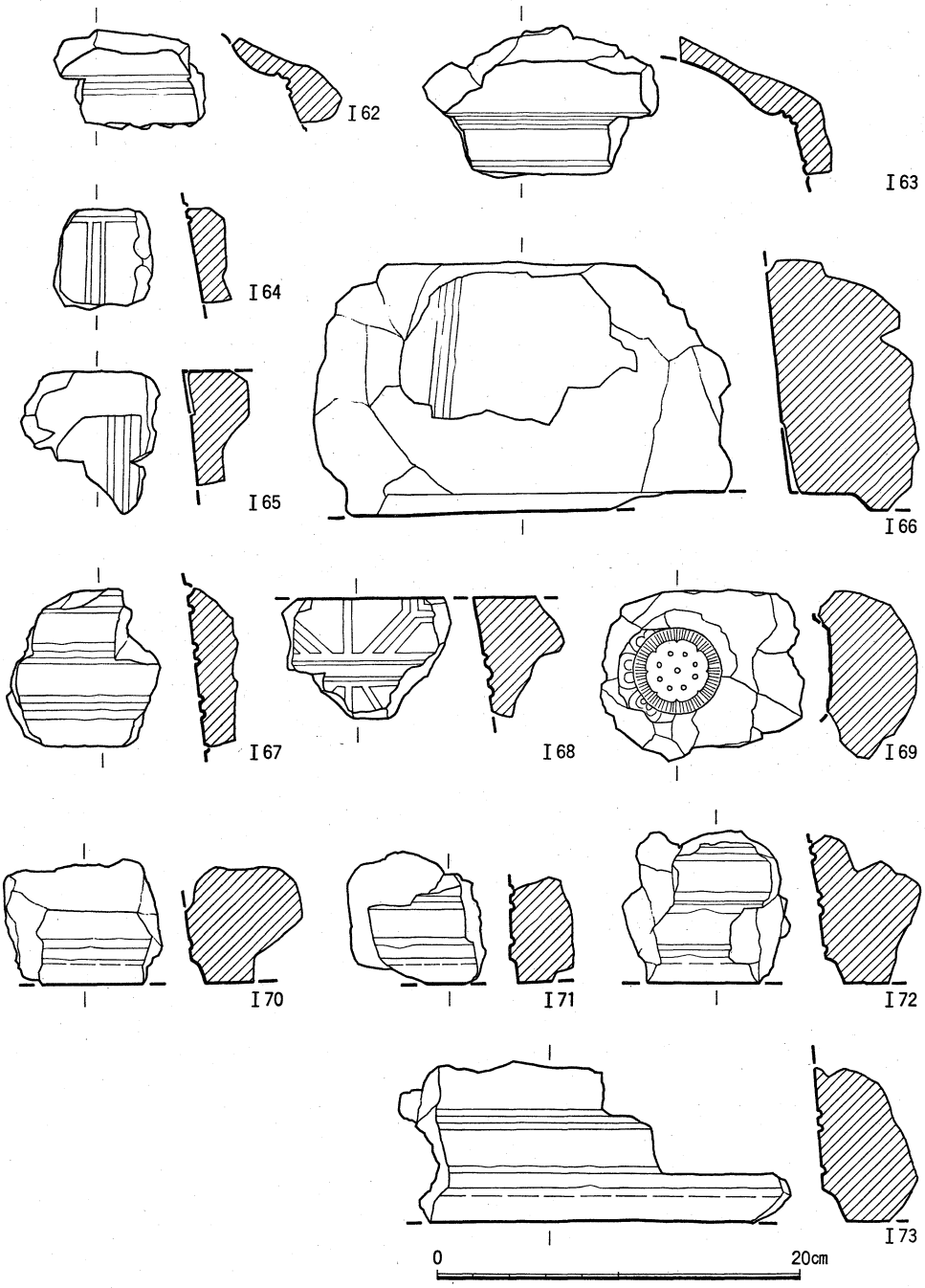


図10　ＳＸ13出土梵鐘鋳型（Ｉ62・Ｉ63笠形と上帯，Ｉ64～Ｉ66池の間，Ｉ67・Ｉ68中帯，Ｉ69撞座，Ｉ70～Ｉ72下帯と駒の爪），ＳＸ17出土梵鐘鋳型（Ｉ73下帯と駒の爪）　縮尺1/4

5　近世の遺跡

(1)　近世の遺跡

近世の遺構には，道路とその側溝，水田，溝，柱穴などがある(図版４，図11)。

道　路　　調査区北半で東北東から西南西にのびる道路ＳＦ１を検出した(図12)。幅は約４ｍで，断面を観察すると，大きく上層と下層にわかれ，２枚の路面が存在したことがわかる。また，それぞれの路面にともなう側溝ＳＤ１・ＳＤ５・ＳＤ15も検出した。いずれの路面も，小礫を一面に敷きつめて一種の舗装をおこなっており轍は存在しない。また，調査区東半では，やや南側へ路面を拡張している。側溝ＳＤ１とＳＤ５の出土遺物か

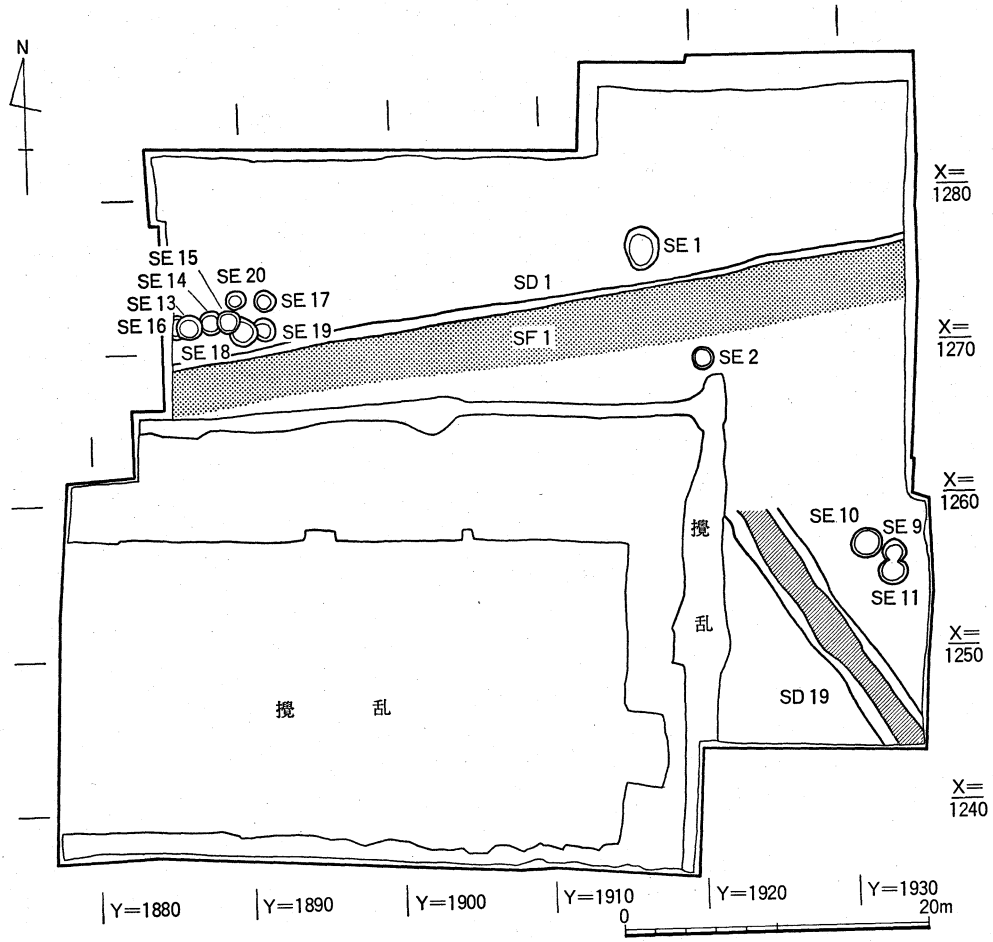


図11　近世の遺構　縮尺1/500

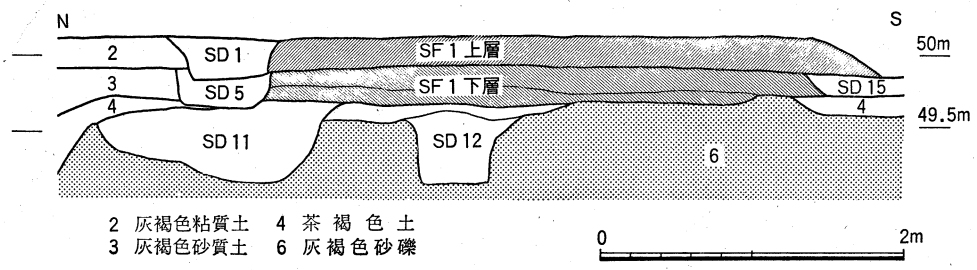


図12　道路ＳＦ１の断面　縮尺1/50

ら，近世後半のものと推定できる。

野　壺　　ＳＥ１，ＳＥ２，ＳＥ９～ＳＥ11，ＳＥ13～ＳＥ20があり，ＳＥ１・ＳＥ２・ＳＥ13～ＳＥ16は漆喰製の枠をもつ。いずれも近世末のものと考えられる。

溝　　ＳＤ19は調査区東南部に存在し，幅約２ｍ，深さ約0.2ｍの浅い溝である。等高線にそって北西から南東へ流れる。SD19の両肩には，低い堤が存在し，一帯の水田への灌漑をおこなう人工的な水路と考えられる。

調査区一帯に堆積する灰褐色粘質土と灰褐色砂質土は，近世の水田耕土や床土と考えられ，棚田の存在も指摘できる。また，幅0.2ｍ程度の南北方向の浅い溝や，柵をなすと考えられる多数の柱穴も検出した。これらは，ともに耕作にともなうものであろう。

(2)　近世の景観復原

京都大学の吉田キャンパス内では，これまでに発掘調査によって多くの近世の道路遺構が発見されている。とりわけ，本部構内で検出した近世白川道の遺構には多くの轍が存在し，旧白川村を経て山中を越え近江へ通じる街道としての旧白川道の歴史的変遷が解明されており〔岡田・吉野80，五十川81・83〕，昭和61年度に調査した本部構内ＡＸ30区の調査では，中世にさかのぼる白川道の路面を検出した〔京大遺跡調査会86〕。今回の調査で検出した道路ＳＦ１は，轍が存在しない。また，近世の『京大繪圖』にも，確実にこれに該当するものは描かれてはおらず，道路ＳＦ１は，吉田山西麓の一小径といってよいものかもしれない。このＳＦ１は，京都大学がこの地に設立される以前の字境界となっていた。また，中世においても，この位置に境界が存在し，伝統的な地割りが近世にまで影響を与えたことは，特筆に価する。このＳＦ１の両脇には野壺が存在し，水田がひろがっていたことが推定され，当地には近世の後半において，のどかな農村の景観が存在したと考えてよい。吉田山を東にのぞむ，こうした農村の景観は，明治30年，当地に第三高等中学校そして京都大学が設立されるまで存続したのである。

6　小　　結

最後に，本調査区の遺構の変遷を整理し，古代・中世の歴史的環境を復原してみよう。

調査区内で最も古い歴史時代の遺構はＳＲ１である。ＳＲ１は旧白川の一支流と考えられ，11世紀ごろに一帯がしばしば河川の氾濫する不安定な土地であったと推定できる。

井戸や土器溜などの生活に関連する遺構は，12世紀後葉から14世紀前葉の間に営まれている。同様の時期の遺構は北側に隣接するＡＯ18区〔泉・吉野79〕でも検出している。この期間は，藤原北家勧修寺流の人々が吉田に居をかまえ，やがて吉田定房が南朝に従い吉野に走るまでの二百余年の間にあたる。勧修寺家の財産譲状には，吉田南亭，吉田園領などがみれ〔中村直41〕，これら一連の遺構から，かれらの邸宅，園地や菩提寺の浄蓮華院を調査区一帯に想定できる。

14世紀前葉からは土取り穴と推定される不定形土坑が出現し，14世紀中葉には地山の高い調査区東半部一帯に広がっている。土取り穴は，15世紀にはほとんどなくなっていると考えてよい。土取り穴が増加する14世紀中葉ごろには，生活に関連する遺構や地境の溝がなくなり，この一帯の土地所有や権利関係に大きな変化が生じたようである。本調査区をはじめＡＰ19区〔清水・吉野81〕，ＡＮ20区〔五十川86〕でも不定形土坑がみとめられるが，これは，14世紀前葉に吉田氏退転の中で権利関係の上で空白となった結果，黄灰色シルトの採取がはじまるのを示すものであろう。また，梵鐘鋳造遺構については，教養部構内ＡＰ22区で平安中期の梵鐘鋳造坑や溶解炉の残片が出土しており〔五十川・飛野84〕，古代・中世の鋳造工房を調査区一帯に想定できる。

梵鐘鋳造遺構については，教養部構内ＡＰ22区でこれを検出した際と同様，多くの方々から有益な御教示を得た。特に，坪井清足，葉賀七三男，木村捷三郎，石野亨，渡辺弘二，上田一男，友野良一，神崎勝，石尾政信の諸氏には，多くの御助言をいただいた。また，本学工学部の神野博先生には出土鋳型や炉壁に付着した金属物質を分析していただき，鋳造原料を確認することができた。末尾に記して謝意を表します。